

2017
おもろ
チャレンジ

「食」から見る台湾女性の社会進出

経済学部 1年

福田 千恵子

台湾

2017年9月1日-

2017年9月25日



渡航概要と内容

<渡航概要>

宿泊及び活動拠点は以下のように計画した。それぞれの拠点に沿ってタームに分け、タームプランを立てた。

- | | |
|-----------------------------|----------------------|
| ターム 1、9/1~9/8 新北市でホームステイ① | プラン：言語の上達、アンケート調査 |
| ターム 2、9/8~9/15 台北市でホームステイ② | プラン：アンケート調査、インタビュー調査 |
| ターム 3、9/15~9/17 台北市でホームステイ③ | プラン：インタビュー調査 |
| ターム 4、9/17~9/25 ホテル | プラン：アンケート調査、インタビュー調査 |

ターム 1 では、研究に使う言語の習得を目標に、積極的にコミュニケーションを図った。ターム 2 では、ホームステイ先の家の周りを歩き回り、アンケートをとることに努力した。また、大学に行き、アンケートやインタビューをしに行くことも積極的に行った。ターム 3 では、一般女性にインタビューをすることに重きを置いて活動した。ターム 4 では、大学に行ってインタビューを行ったり学生へのアンケートを行ったりすると共に、町中の人へのアンケートに尽力した。

今回の渡航での目標は「女性の社会進出と台湾の食文化が関係しているという仮定を検証する」であった。対象は家庭を持った女性で、彼女らが仕事をする事と外食産業が盛んなことは関係しているのではないかというのが私の意見であった。目標達成のための手段として、i アンケート ii インタビュー iii 食生活体験 の 3 つの方法をとった。アンケートは日台比較をするために事前に日本語版を京都（四条河原町）で 55 枚とり、渡航中は中国語版を台北各地で 120 枚とった。また、ウェブアンケートを通して 101 枚のアンケートを収集した。インタビューは、女性 24 名に対して行った。途中インタビュー内容を変更したりなど研究結果の方向性に合わせて臨機応変に対応した。食生活体験としては、典型的な台湾人と同様に、台湾的な朝ご飯を外で食べ

るというスタイルを実践してみた。お店の人に人気の商品を聞いたり、食べている人や注文している人の商品を確認したりすることで、より現地の人のお食事の在り方を体験できるよう努力した。

現地での研究を行った結果、仮定は検証できず、女性の社会進出と外食文化には本源的な関係性はないという結果になった。女性の社会進出と台湾における外食産業の発展にそれぞれ異なる要因を見つけたので、ここで紹介したい。台湾で女性の社会進出が盛んな理由は大きく二つある。一つ目は、金銭的な問題だ。夫の収入だけでは生活をしていくことができない状況にある人が多く、また日本のように終身雇用制度もなく転職をよくするため仕事が不安定であることから、夫婦共に働くことが必要だという理由である。二つ目は、女性の感情の面である。中国語に「女強人」という言葉があるように、性格が男の人より女性の人の方が強く、また女性は男性に依存したくないと考える文化があるからである。さらに、夫と妻で財布が分かれていて、女性が自由に買い物をするには自分で稼ぐしかないということもあるようだ。一方で、台湾において外食産業が盛んな理由は、価格である。1990年代に、外食にかかる値段と自炊にかかる値段が入れ替わり、外食する方が安くなった。以下は私がインタビューを通して得た情報とそこから文献調査を行うことで導き出した流れである。1980年代に急速な経済成長を経た台湾では、1990年代にはお金に少し余裕を持てるようになった。そして少しお金を足せば質素な自炊したご飯より具沢山なお弁当を食べられることから、外食に移行したと考えられる。今では、何時でも何処にでも安く食料を提供する飲食店があり、台湾人の方は「そこに山があるから」のごとく外食をとる。今となつては、価格という理由に合わせて、至る所に飲食店があるという環境が外食をとる大きな要因となっている。このようにして、女性の社会進出と台湾人の外食産業の発達には根本的な関係性はないことがわかった。

今回の仮説の悪いところは、食文化に限った話をしてしまったということである。研究を通してわかったことは、私が立てるべき仮説は「女性の社会進出と、“家事文化”」であった。そもそもの「女性のご飯を作らなくていいので働きやすい」という仮説に対して、台湾では男女平等の考えが広まっており、女性にご飯作りや掃除と言った家事を全て任せることはないという。家事は全て家族で分担して行うと聞いた。すなわち、もう少し視点を広くして食事から家事へと話を移し、家事の分担がなされているから、女性の社会進出が進んでいるという仮説を立てるべきであった。今回インタビュー調査で獲得した情報や、軽いおしゃべりの中で聞いた情報から、この仮説が妥当性を得ていることは明確なので、今後はこの新しい仮説を基に研究を続行していきたいと考えている。

今回の渡航を通して、予想外な事が判明し、予想外なことが度々起きた。研究についても、仮定が検証できないどころか、仮定が違うことがわかり始めたときは、どのように研究を続ければいいのかわからなくなった。インタビュー内容も、迷走しだした。研究とはあまり関係ない、健康に関する意識や運動についてのヒアリングをするなど、本筋から外れていった。(しかし、そのおかげで、食文化以外の様々な台湾の文化や考え方を



知ることができたのでこれに関しては今ではよかったと感じている。) 渡航中に研究の方向性がわからなくなるのはこれほど不安になるのかと思い知った。

インタビューやアンケートにも、かなり苦労した。渡航前にアポイントメントがあまり取れなかったため、現地で人につないでもらったり、企業に行き突撃アンケートも行ったりしたが、見知らぬ外人に温かい手を貸してくれる人は多くはなく、すごい剣幕で怒られることもあった。そのような突撃訪問を定期的に行うことは、精神面の負担がかなり大きかった。しかし、優しく親身になってくれた台湾人の方に会うときも幾度かあり、その時はその優しさにたくさん助けられた。

研究の方向性が不透明で、アンケートを取るための突撃訪問に心痛し、毎日人に気を遣うことに疲れを感じ出し、渡航中は辛いことが重なり重なった。ホームステイ泊なので、泣きたくとも泣く場所がないというのがまた辛かった。しかし、今になって振り返ってみると、辛かったことよりもたくさんの台湾人の方と触れ合えた楽しさばかりが思い出され、わざわざ思い出さないと辛かった記憶が出てこないのが不思議である。渡航時はあれほど辛かったのに今は何とも思わないのである。すなわち、渡航中にどんなに辛いことがあっても我慢して耐えきれば、渡航後にはすっかり忘れて楽しかった思い出だけになるので、渡航中も「渡航後にはへっちゃらに思うのだろう」と軽い気持ちで辛いことに向き合えばよいということである。これは渡航後に得た、大きな発見である。

台湾は比較的日本と近い文化を持ち、かつ親日国と言われているため、台湾だからというトラブルはなかった。しかし、「日本人は〜だ」という類の軽い冗談を言われることで、辛く感じたり恐怖や疎外感を感じたりすることはあった。その時は笑って過ごすしかなかった。渡航先では外国人であるので、仕方がないと思っている。



アンケート（中国語版）
すごい量で広げてみて驚いた



ホストファミリーの方々
とても親切に接してくださり、もう感謝の言葉しか出てこない



現地で食べた朝ごはん。朝ご飯屋は朝5時くらいから空いている。そして、夜は閉まる。
日本には全くない文化だと思ってしまう。しかし、朝ごはんから食を楽しめる環境はとても良い。



臭豆腐。「食べる勇気があるか？」と聞かれたら、「ある！」と言わない手はない。
個人的な感想としては、臭いだけで、普通のあつあげと変わらない気がした。



饅頭を売っている様子。肉まんみたいなものだが、日本の肉まんより断然こっちの方がおいしい。そして断然安い。

渡航を通じて感じたこと・学んだこと

渡航を通して感じたこと・学んだことは数多くあるので、その中で次の3点を取り上げたい。一つ目は、言語はなんとかなるということである。台湾では日常生活からはじまり、インタビューまで全て中国語を使用した。しかしながら、渡航前の私の中国語はかなりひどいものだった。私は小学校の4年間を台湾で過ごしたが、日本人学校に通っていたため、その時は少し会話が聞き取れるレベルで、そしてそれから6年間ほったらかしにした中国語に、どれだけ現地で戦える力があるのかとかなり不安に感じていた。台湾に実際に行ってみると、始めの2、3日は辞書を使ってなんとか会話をするという感じであったが、その後は辞書をあまり使わなくとも会話をできるようになり、1週目の後半では冗談を言って会話を楽しむこともでき、2週目の半ばには中国語でインタビューができるようになった。また、2つ目のホストファミリーは台湾語が主流の家庭だったので、台湾語も少しだけだが話せるようになった。言語は話すしかない場所で、心を決めて積極的にがむしゃらに話しに行けば、完璧でなくても意思疎通のできるようになると実感した。中国語が自然に出てくるようになったときの嬉しさは何とも言えない。ただ、文法が

乱雑で語彙数が少ないということに関しては語学学習を通してでは改善できないこともわかった。この経験は、今後の言語学習への意欲となったと思う。そして、今回は英語ではなく中国語を使ってコミュニケーションを取ろうとしたことが、台湾の方と親密になれた大きな理由だと考えている。現地の言葉を学び、頑張って話そうとする姿を見せることは、現地人の興味を引く。台湾語を少し話せるようになった後は、初対面の人とも早く打ち解けて仲良くなれた。(台湾の標準語は中国語だが、年齢の高い世代の多くは台湾語を母語とする。)

二点目は、台湾の生活スタイルや価値観を広く深く知ることができたという点である。私は以前台湾に4年間も住んでいたにも関わらず、台湾人の生活習慣・文化・考え方をあまり知らなかった。今回の渡航を通して、積極的に台湾人の人と関わりを持とうと努力し、また一方で研究と言って彼らにとっては当たり前のことを何度も繰り返し質問することで、台湾を以前より断然深く知ることができた。以前4年間住んでいた時よりも、確実に濃度の高い25日間を過ごしたと思う。住んでいた頃は食べなかった台湾らしい食べ物や味付けのものも、今回の渡航中は毎日食べ、当時は不得意であったその味が今では癖になっていることから窺えるだろう。

三点目は、台湾人はとてつもなく優しいという点である。日本人より確実に優しいと思う。今回は3か所でのホームステイだったが、どのホストファミリーも、私にたくさん気を使ってくださり、優しく接してくださった。研究に関しても、どうやって手伝うことができるか真剣に考えてくださった。また、どうしたら私が楽しく有意義に台湾で過ごすことができるかを常に考えてくださり、私を喜ばせようと色々なことをしてくださった。他にも、インタビューやアンケートをとることで知り合った様々な方の優しさに、大いに助けられた。この渡航が私にとって忘れてくれない素敵な旅となったのは、ひとえに台湾人の優しさがあったからである。

■ 今回の経験をどのように今後生かしていくか

今回の経験は、紛れもなく私の大切な宝物となった。今回の経験を自信に変えて、今後も様々なことに挑戦していきたい。海外に一人で行くということを今まで考えたことがなかったが、今後は一人で海外に飛んでみたいと思っている。また、海外旅行で終わるのではなく、何か研究など目的を決めてそれを求めながら、現地人と関わりを持つ努力を欠かさないようにしたいと思っている。

他にも、渡航中はよく不安になって台湾の方に道や店を聞いていたので、今後は日本で困っている外国人を見かけたら積極的に話しかけて不安を和らげてあげたいと思う。また、日本語以外を使って交流することの楽しさを実感したので、日本にいても外国人と関わる機会を作りたい。

そして、奨学金をいただくことで始めて渡航ができ、さらに私が渡航したことで他の渡航志望者が一人いけなかったという事実があるため、今回の渡航を「楽しかった」だけでは終わらせたくないという気持ちが強い。今後も機会があれば、活発に今回の経験を発信していきたい。

研究に関しては、今後も今回得た情報を元に更に深めていきたいと考えている。

■ 今後本プログラムを希望する学生へのアドバイス

自分の研究がある方もない方も、ぜひ、ご応募されてみてはいかがでしょうか。せっかくなので胆力をつけるためにも、お一人でご応募されてみてはいかがでしょうか。大学がバックボーンとなった状態で行きますので旅行とは異なる経験ができますし、また一方で京大らしく全てが自由ですので、自分の計画力がこぞとばかりに試されます。30万円もいただきこんな経験をさせていただけのおもろチャレンジは、正直すごすぎると思っております。こんな魅力的なチャンス、逃すのはもったいないです。

■ 主な奨学金の使途

*ホームステイ費・宿泊費

*調査費

*食費

*渡航費

*海外旅行保険

*その他経費 など